



TITLE:

<學界展望>西曆十三世紀の小アジア

AUTHOR(S):

井谷, 鋼造

CITATION:

井谷, 鋼造. <學界展望>西曆十三世紀の小アジア. 東洋史研究 1980, 38(4): 664-674

ISSUE DATE:

1980-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153758>

RIGHT:

學界展望

西曆十三世紀の小アジア

井 谷 鋼 造

小アジア（アナトリア）半島はアジアの西端に位置し、古來幾多の民族の支配下にあつたが、最終的にこの地の主となつたのは現在のトルコ共和國を形成するトルコ人である。彼らは西曆十一世紀以來、小アジア（當時はルーム・*Rum* 地方と呼ばれていた）に流入し、この地を住地として數世紀を経た後、アジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸に跨る世界的な大帝國オスマーン朝國家をうちたてた輝かしい過去を持つ。オスマーン朝國家は西曆一四五三年にコンスタンティノープルを攻略し、ビザンツ帝國を滅ぼして以來、その華々しい活動の舞臺をバルカン半島の側に移してしまつたと言われるが、小アジアがその後もオスマーン帝國において樞要の位置を占めたことは *Rumeli*（オスマーン帝國のバルカン半島側領域）と *Anadolu*（小アジア側）が並び稱された如く今世紀に到るまで變らなかつた。すなわち小アジアは十一世紀末より現在に到るまで彼の地に居住したトルコ人にとって祖國となつた土地であり、現在のトルコ共和國に連なるオスマーン朝を初めとするトルコ人國家が生まれ、育つた地域である。それとともに小アジアの地は、地圖を見れば明らかなように、その北は黒海、南は地中海に面し、西はバルカン半島に接し、東はアルメニア、グルジアからアゼルバイジャン地

方に連なり、東南はシリアと上メソポタミア（*al-Jazira* 地方）に到り、アジアとヨーロッパ、コーカサスとメソポタミアをつなぐ接点となつてゐる。東西を結ぶ交通路が幾本も小アジアを通過し、こうした事情で小アジアは世界史上の諸事件の數々に遭遇することとなつた。古くはアケメネス朝ペルシャとギリシャの戦役やアレクサンダー大王の東方遠征から、中世の十字軍運動、モンゴル人の西征、あるいはティムールの遠征など、どれも小アジアを通過して、あるいは舞臺として行なわれたものである。こうして小アジアの地は世界史とも深くかかわる地域であることが理解されよう。

西曆十一世紀末以來、十四世紀初めにアナトリアの邊境でオスマーン朝國家が産聲を上げるまでの二百年以上の期間小アジアの主要部はセルジューク朝のスルターン（ルーム・セルジューク朝）の統治下にあつた。このセルジューク朝のスルターン政權（ルーム・サルタナト *Saltanat Rum*）は現在のトルコの最も古い直接の祖先と呼べるであらう。従來、我國の學界では十一世紀末以來オスマーン朝創建に到る小アジアの歴史に關する研究は皆無といつてよい。僅かに三橋富治男氏の文獻紹介のための一篇の論文「小アジア（ルーム）セルジューク朝史研究のための本原史料と傍證史料」（千葉大學文理學部紀要文化科學篇第二輯、一九六〇）を見出すのみである。本稿では小アジアのセルジューク朝國家の歴史を概観した上でヨーロッパおよびトルコにおける諸研究を紹介し、併せて筆者自身の展望を記しておきたい。西曆十三世紀という時代を選んだのは小アジアのセルジューク朝國家に關する史料の多くがこの世紀以降に書かれたこと他に、小アジアのトルコ人の歴史という観点からも、また廣く世界史的な観点からもこの時代がとりわけ重要であると考

えられるからである。

I

西暦十世紀後半以来、西アジアのイスラーム世界の中心地バグダードはシーア派を奉ずるダイラム人のブワイフ朝の統治の下にあったが、十一世紀後半に到り、東方より Toghril Beg に率いられたセルジューク朝の軍隊がイランを経て侵攻し、一〇五五年にはバグダードに入城してこの町を再びスナ派の手に取り戻した。セルジューク朝はトグルル・ベグを繼いだ Alp Arslan のもとに大帝國を形成し、エジプトのファティマ朝とイスラーム世界を二分する形勢を現出した。トルコではこのセルジューク朝を大セルジューク *Büyük Selçuklu* と呼ぶ。セルジューク朝の英主アルプ・アルスランは小アジアに遠征して一〇七一年東部アナトリアのマラズギルト (*Malazgirt=Manzikert*) でビザンツ帝國の軍隊を撃破し、時のビザンツ皇帝ロマンヌ・ディオゲネス (*Armanus*) を虜とする大勝利を得た。この事件を契機に小アジアへ大量のトルコ人 (トルコマン) が流入した。そしてマラズギルトの勝利から十年を経た一〇八一年にはビザンツ帝國の都コンスタンティノープルに程近いニケーアの町が *Sulaymān bin Qutalmish* の手中にあった。この人物こそルームのスルターンたちの祖である。そしてイスラーム教徒によるニケーアの攻略はビザンツ帝國に脅威を與え、この事件が一因となってビザンツ皇帝の要請により西歐に十字軍が組織されたことは史上有名である。スライマーンの父 *Qutalmish* は大セルジューク朝の初代スルターン・トグルル・ベグの従兄弟にあたる。クタルムシの父 *Isrā'il* はトグルル・ベグの父 *Mikail* の兄で、別名を

Yabgu Arslan と言い、ガズナ朝のスルターン・マフムードに捕えられ、獄死したという。クタルムシもまたアルプ・アルスランに背いて一〇六四年にイランの *Rayy* 近郊でアルプ・アルスランと戦い、*Gird-kūh* への敗走途中、羊小舎で絶命したという。クタルムシの子スライマーンはセルジューク帝國の名高い宰相 *Nizam al-Mulk* の執成で助命され、アルプ・アルスランの跡を繼いだスルターン *Malik shah* によって小アジアへ送られた。そして十年足らずの間にスライマーンはビザンツ領小アジアを東から西へ横断し、コンスタンティノープルを目前にしたニケーアの町に現れたのであった。

スライマーンの成功の要因は、單にビザンツ側の弱體化という事實だけでなく、セルジューク朝と何らかの關係をもったトルコマンが十一世紀前半以来ほとんど絶え間なく小アジアへ *ghaza* (略奪のための遠征) を行ない、小アジア内陸部へトルコ人が浸透していったという事實に求められよう。M. H. Yinanç は *Türkiye Tarihî-Selçuklu Devleti I. Anadolu'nun fethi, İstanbul, 1944* の中で、一〇一五—一〇六六年セルジューク朝の *Chaghrî Beg*—トルル・ベグの兄弟でアルプ・アルスランの父の指揮下、東部アナトリアへの *ghaza* が行なわれたことを述べている。また Yinanç によれば、小アジアへはスライマーンの他に、後になってそれぞれ侯國 (*imarat*) を建てることになる *Artuğ Beg* や *amir Danishmand* が相次いで侵入した。このうちダーニッシュマンドは中部アナトリアに國家を建設し、セルジューク朝のルーム・スルターンと勢力を拮抗させるまでになった。スライマーンはその後、アレppoをめぐってマリク・シャーの弟 *Tutush* と戦い、戦死した (一〇八

六)。スライマーンの子 *Ölitch Arslan* は人質としてマリク・シャールの許へ送られ、成立間もないルーム・サルタナトはその主を失った。マリク・シャールの死後(一〇九二)クルチ・アルスランは解放されて小アジアへ戻った。しかし一〇九七年小アジアに上陸した第一回十字軍によってニケーアは占領され、*Dorylaem* (トルコ名 *Eski Şehir*) の戦いに敗れたルーム・サルタナトの都はコニヤ(*Konya=Quniya*)へ移った。そしてクルチ・アルスランもまたユーフラテス河支流の *Khabur* 河畔でマリク・シャールの子 *Muham-mad* の軍と戦い、敗死した(一一〇七)。スライマーンといふ、クルチ・アルスランといふ、國家草創の時期に二度までもその君主を大セルジューク朝との戦いで失ったことはルーム・サルタナトに大きな影響を与えずにはおかなかった。

クルチ・アルスランの死後三年を経て、子の *Shahanshah* がスルターン位に即いたが、三年後ダーニッシュマンド朝の後押しを受けた弟の *Mas'ud* に位を奪われた。*Mas'ud* は一一一六年から一一五五年まで位に在って國家の基礎を固め、西でビザンツ帝國と、東でダーニッシュマンド朝と争った。*Mas'ud* を繼いだ *Ölitch Arslan* II 世は一一七六年 *Myriocephalum* における戦いでビザンツ皇帝マヌエル・コムネノスの軍を破り、ビザンツ帝國の小アジア回復の希望を完全に打ち砕く一方、一一七八年にはマラトヤ(*Malatya=Malatya*)を占領してダーニッシュマンド朝を滅ぼし、小アジアのムスリム・トルコ人のチャンピオンとしての地位を確立した。しかし、一一八六年、年老いたクルチ・アルスランが九人の息子と二人の弟と甥に自らの領土を分配するや、彼らの間でスルターン位の繼承をめぐって激しい争いが起り、小アジアの各地にセルジューク朝

の王子たちが割據する中、一一九〇年には神聖ローマ皇帝フリードリヒ・バルバロッサ率いる十字軍が首都コニヤに侵入する事件さえ發生した。一一九二年にクルチ・アルスラン II 世が死ぬと、十一人の王族の間でスルターン位をめぐる争いは激しさを加えた。結局一二〇四年までに王族の一人である *Rukn al-Din Sulaymān Shāh* がサルタナトの統一を回復したが、この人物はすぐに死に、その跡をクルチ・アルスラン II 世の末子 *Ghiyāth al-Din Kay-khusrow* が繼いだ。このスルターンに續く三代の期間ルーム・サルタナトは最も安定し、繁榮した時期を迎える。カイホスロウは大セルジューク朝の歴史を記した史書 *Rahat al-Sudūr wa Āyāt al-Surūr* が著者 *Rawandī* によつて獻呈されたスルターンである。すなわちイラン、イラクにはもはやセルジューク朝の君主は居らず、今やセルジュークの血統を繼ぐものはルームのスルターンのみとなったのである。カイホスロウの跡を繼いだ *‘Izz al-Din Kay-kāwūs* (1211—1220) と *‘Alā’ al-Din Kay-qubād* (1220—1237) は共に有能なスルターンであり、この二人の時代にルーム・サルタナトの國勢は大いに伸長した。とりわけカイクバードの治世には國家はめざましい發展を遂げた。カイクバード時代セルジューク朝國家はモンゴル軍に迫られてアゼルバイジャンに現れたホラズムシャー *Jalāl al-Din Mengübirī* を一一三〇年ホルズンジャン(*Erzinjan=Arzinjan*)近郊の *Yasī Chānan* で敗退させて東部アナトリアの *Akhlat* までは進出し、さらに黒海を渡ってクリミア半島の *Sughdaq* までは進出した。後世のオスマーン朝の史料 *‘Āshiqpāshā-zāda* の *Tawārīkh-i ‘Alā’i ‘Uthmān* にあつてスルターン *‘Alā’ al-Din* は傳説的な名君として語られているように、カイクバードの榮譽は後世まで語り繼

がれた。トルコの史家 Osman Turan は 'Alā' al-Dīn Kay-qubāḍ の治世を *ilbal devri* (繁榮期) と呼んでゐる。しかし 1133 年カイバードが没して息子の Ghiyāth al-Dīn Kay-khosrow II 世がスルターンに即位するとルーム・サルタナトには停滞と弱体化が現れた。一二四〇年 *khawārij* の Babay による宗教的な反亂がアナトリアの東南部に發生し、多くのトルコマンがこの反亂に参加した (Babā, Ishāq の反亂)^①。ルーム・サルタナトはフランク人の力を借りてこの反亂を鎮壓したが、一二四二年にはモンゴル人がエルズルム (Erzurum=Arzan al-Rūm) に侵攻し、翌一二四三年スルターン・カイホスロウ II 世の軍は Köse Dag において Bayju Noyan 率いるモンゴル軍の前に潰走し、モンゴル軍がスィヴァース (Sivas=Sivās) とカイヤリ (Kayseri=Qayseriya) を征服するところ事態に到った。冬の訪れと共にモンゴル軍がアゼルバイジャンの牧地へ歸還する際、ルームの宰相 (ṣāhib) Muḥaddhab al-Dīn はバイジャ・ノヤンに同行し、Mughān の牧地でモンゴル人に對して口となり (すなわち服屬し) 毎年貢物を献上することを約した。一二四三年のモンゴル人の侵入の結果ルーム・サルタナトはモンゴル帝國に服屬する地位に甘んじなければならなかった。そしてこの時点から半世紀餘を経てルーム・サルタナトはモンゴル人に對する屬國の地位のまま史上から姿を消した。

以上述べてきたように十三世紀の小アジアはその前半がカイバードに代表される安定と繁榮の時期であつたのに對し、モンゴル人の侵入という未曾有の大變動を蒙つたその後半はルーム・サルタナトにとって衰退と零落の時代であつたといえよう。モンゴル人の侵入以後王朝の滅亡までのルーム・サルタナトの歴史については次節

で最近の研究動向を紹介しつつ觸れてみたい。

II

西曆十三世紀の小アジアに關してはこの時代が「オスマーン朝前史」と考えられることから、從來オスマーン朝史に關する概説の類において少しく觸れられてきた。しかし、十三世紀の小アジア、セルジューク朝期のルーム (小アジア) の歴史に關する專著としては筆者の知る限り、次の三冊を挙げられるのみである。

- 1) Claude Cahen, *Pre-Ottoman Turkey*, London & New York, 1968.
- 2) Osman Turan, *Selçukular Zamanında Türkiye*, İstanbul, 1971.
- 3) В. А. Гордлевский, *Государство Сельджукидов Малой Азии*, Москва-Ленинград 1941.

1) の *Pre-Ottoman Turkey* はその名の通りオスマーン朝以前の小アジアの文化と歴史に關する概説 (general survey) であり、序論の他四部に分れる。第一部は大セルジューク帝國、第二部は一二四三年までの小アジア、第三部はモンゴル侵入前の小アジアにおける社會と制度、第四部はモンゴル時代の小アジアを扱っている。

この本の特徴は中世の西アジア史全般について廣い學識をもつ著者カーエンによる小アジアの社會と文化についての豊富で詳細な記述を含んでいる點にある。カーエンはベルシャ語、アラブ語の他、アルメニア語、シリア語、ビザンツ帝國の史料などにも言及しており、その博識ぶりには脱帽せざるを得ない。ただ政治史に關しては稍雑然とした印象を拭えず、いくつかの誤解や誤りを含んでいる。

たとえばルームのスルターン「Alā' al-Dīn Kay-qubād」とアイユーブ朝の Malik al-Ashraf が連合してホラズムシャー Jalāl al-Dīn を撃破した Yassī Chaman の戦いの行なわれた年月を一二三一年七月としたり (p.130 實際は一二三〇年八月) ルームのスルターン、カイホスロウⅡ世が Kōse Dağ の戦いでモンゴル軍の前にあえなく敗走してルーム・サルタナトがモンゴル人に服属するようになった後 Savīn Khān バトツ大王の許へ派遣された Shams al-Dīn Isfahānī という人物がバトツからルーム地方における Bakim (太守) の地位を與えられたという史料の記述をルームにおけるバトツの代理としてスルターン、カイホスロウが任命されたという風に読み違えている (p.269)。モンゴル時代以降の小アジアの歴史に關してカーエンが最も注意を拂っている點は十三世紀小アジアに流入したトルコマンについての問題である。カーエンは *Pre-Ottoman Turkey* の第四部中「トルコマン諸侯國の形成」「種族的展開」(ethnic evolution) の二節でこの問題を説明する他「Notes pour l'histoire de Turcomans d'Asie Mineure au XIII^e siècle」*Journal Asiatique* 239 (1951): “Questions d'histoire de la Province de Kastamonu au XIII^e siècle” *Selçuklular Arastırmaları Dergisi* III (1971) などの論文を發表した。十三世紀の小アジアのトルコマンについては彼らが十三世紀末以來小アジアの各地に beylik (侯國) を建て、割據した事實から後世との關連に於いて最も關心のもたれるテーマである。

トルコ共和國の史家オスマン・トゥランの手になる2)の *Selçuklular Zamanında Türkiye* は永く Anadolu Selçuklular (ルーム・サルタナト) 研究に携わってきたトゥランの政治史研究の集大

成とも言ふべき著作である。全篇七百頁を越す大著で「アルプ・アルスランからオスマン・ガーズィーまで」「二百五十年近い小アジア史を縷述したものである。*Pre-Ottoman Turkey* と違って、各頁に入念な脚註を附し、その参考文献の中には未だ公刊されていない寫本類を含み、完成度の高い研究書であるといえる。ただ敢えて難點と思われるのは膨大な史料を駆使して歴史的事實の檢證にあたるの餘りに稍統一的な觀點に缺ける嫌のあることと、「トルコ人」の歴史という視點から、たとえばアルメニア人のトルコ人に對する從屬といった問題を必要以上に強調しすぎることである。トゥランはセルジューク朝期の小アジアを中心に *İslam Ansiklopedisi* (イスラーム百科辭典のトルコ語版) に多くの記事を執筆する一方、ルーム・サルタナトに關する史料の公刊と多方面にわたる研究論文の發表を行なつた。中でも重要であると思われるのはセルジューク朝期のワクフに關する一連の研究を發表していることである。この研究は現存するワクフ文書の詳細な檢討を基礎にしたもので、現地の學者ならではの成果である。トゥランは他にルーム・サルタナトの土地法や金融に關する論文も發表しており、經濟史的側面における關心の廣が窺える。

ソ連邦の歴史學者、文獻學者 B. A. コルンツェフスキー (一八七六一一九五六) の3) *Тюркские Сельджукиды Манаш Азиз* は獨り戰のさなかに刊行されたものであるが、當時としてはトルコの M. H. Yılmaz や M. Fuad Köprülü の研究を踏まえた比類のない研究書であつた。全體は序説の他、十七章に分けられ、小アジアのセルジューク朝國家の政治、社會、文化の各分野にわたる研究が收められている。中でも筆者が最も多くの頁をさいて論じている

のは小アジアにおける「封建制度」の問題である。この中で述べられている *iqta'* は西暦十世紀以来の西アジア社会を特徴付ける最も大きな要素の一つと考えられるが、小アジアにおけるイクターの問題がゴールドフェスキの研究書において取り上げられた意義は決して小さくない。

一九七一年は一〇七一年に行なわれたマラズギルドの戦いから數えて九百年目に當たるため、それを記念してトルコ共和国では一九七〇年前後にセルジューク朝全般に關する多くの研究が發表された。上に述べたオスマン・トゥランの「セルジューク朝期のトルコ」もその一つである。一九六六年には E. Bilgic, M. A. Köymen, M. Önder, F. Sümer 及び Selçuklu Tarih ve Medeniyeti Enstitüsü「セルジューク朝歴史・文明研究所」がアンカラに創設され、一九六九年から研究誌として *Selçuklu Araştırmaları Dergisi* が發刊され始めた。この研究誌の第一巻の巻頭を飾ったのは Faruk Sümer の *"Anadoluda Moğollar"* である。この論文は百四十七頁もある長大なものであるが、内容は非常に充實している。それはカーエンやトゥランの著書が編年誌的に諸事件を羅列し、内容的なまとまりに缺けるのに對して、Sümer の論文は「アナトリアのモンゴル人」というテーマを軸に一つの統一的な視點の下に諸事件に言及している點にあると思われる。スュメルはこの論文の中で小アジアに到來したモンゴル人がいかなる部族の出身であったかを詳細に分析した後、彼らの定着過程を述べている。しかしこの論文の前半の内容の中心はむしろモンゴル侵入後のルーム・サルタナトの歴史とアナトリアに新たに流入したトルコマンの動向についてである。實際、モンゴル人の西征の結果、アナトリアへ多く

のトルコマンが流入した。彼らはルーム・サルタナトによって西方ビザンツ帝國との境界附近やアナトリアの北部、東南部の邊境へ追いやられたが、モンゴル人のルーム侵攻後、サルタナトの權力が衰えると各地で反亂を起した。そして一二七〇年代以降ルーム・サルタナトに代つてモンゴル人（イル汗國）の直接的な小アジア支配が強まると、トルコマンは Qaraman 家を先頭に度々反亂を起し、モンゴル人と對立した。そして十四世紀にモンゴル人の勢力が後退し始めると、小アジアには Qaraman, Germiyan などの諸ベイリクが各地に生れ、ベイリク時代が始まるのである。十三世紀の小アジアにおいて新たに流入したトルコマンは來たるべき時代の扉を開く原動力となったという意味で最も重要な役割を演じたと言つてよい。この意味でスュメルが「アナトリアのモンゴル人」の中でトルコマンとモンゴル人の問題を扱ったことは十三世紀の小アジア研究に重要な貢獻を行なったといえるであろう。スュメルは Oğuzlar, Ankara, 1967 や Kara-koyunlu, Ankara, 1967 などの著者、オグズ||トルコマンの歴史に關する研究の第一人者であり、今後「セルジューク朝歴史・文明研究所」を主宰する一員として活躍が期待される。トルコではスュメルその他 Ali Sevim, Nejat Kaymaz などがルーム・サルタナトに關わる研究に携わっており、セヴィムは一九七二年 *Abū Bakr ibn al-Zakī al-Qunawī ʿs Rawḍat al-Kutub wa-Hadīqat al-ʿAlab* という史料を校訂して刊行している。セヴィムもまた「セルジューク朝歴史・文明研究所」を主宰する一員である。カイマズは一九七〇年 *Pervâne Mu'inü'd-Din Süleyman* という有名なバルヴァーネ宰相^⑧に關する專著を出版した。トルコではオスマン・トゥランのような大家に代つて數は少い

が期待すべき研究者たちが現れて来ている。一方、歐米ではカーエンに續いてルーム・サルタナトを取り上げた研究を行なったのは、筆者の知る限りでは Speros Vryonis Jr. 位である。ギリオニスはビザンツ帝國側のギリシヤ語文獻を駆使して *The Decline of Medieval Hellenism in Asia Minor and the Process of Islamization from the Eleventh through the Fifteenth Century*, University of California Press, 1971 を刊行した。ソ連ではホルドレンスキー以後 H. H. Шенгелия が筆者の知る限りでは二篇の論文を發表した程度である。^⑨

ここでモンゴル侵入後のルーム・サルタナトの歴史について筆者の所見を述べておきたい。先ず、以下に當時のルームの政治史を簡単に記しておく。一二四三年のモンゴル人の侵入後ルーム・サルタナトはモンゴル帝國に服屬した狀況に置かれ、そのサルターンたちの運命は初めモンゴル帝國の首都カラコルムで、後にはイル汗國のハン達の許で決定されることになった。一二四五年サルターン、カイホスロウⅡ世が急死すると、當時の宰相 (sāhib) Shams al-Din Isfahani の盡力でカイホスロウの長子 'Izz al-Din Kay-kāwūs Ⅱ世が新サルターンに擁立された。彼は當時十一歳にすぎず、サルタナトの國事は専ら宰相シャムスディーンが掌握していた。ところが一二四六年モンゴルの大カン、グユクの即位に列席したカイカーウスⅡ世の弟 Rukn al-Din Qilich Arslan Ⅳ世は大カンより兄を廢して自らがサルターンに即位するようにという yarlıgh (敕書) を得て小アジアへ歸還した。サルタナトではカイカーウスを擁立したサーヒブ、シャムスディーンが大カンの敕書にあった命令で處刑されたが、結局二人の兄弟は妥協し、末弟の 'Alā' al-Din Kay-

qubād Ⅱ世も加えて三人の兄弟がサルタナトを統治することになった。カイクバードⅡ世はモンゴルの大カン、モンケの許へ赴く途上で病没したが (一二五四)、カイクバードの出發後カイカーウスとクルチ・アルスラン兄弟の間でサルターン位をめぐる争いが起り、カイカーウスが勝利したのも束の間、一二五六年にはバイジエ・ノヤンが再び小アジアに侵攻してアクサライ (Aqsaray) 近郊の Sulṭān Khān でルーム・サルタナト軍を破った。カイカーウスはコニヤを捨てて當時ビザンツ帝國の皇帝の居たニケーアへ落ちのびた。バイジエはクルチ・アルスランをルームのサルターンとしたが、バイジュがフラグのバグダード攻略に動員されて小アジアを離れるやカイカーウスがビザンツ側の支援を得てコニヤを奪回するという事態になった。結局、大カン、モンケの命令でサルタナトの領土は二分されて東半分をクルチ・アルスラン、西半分をカイカーウスが統治することになった。二人の兄弟サルターンはその後フラグ・ハンの幕營へ共に出頭したりしたが、一二六一年にはモンゴル軍の強力な支援を受けてクルチ・アルスランがコニヤに入り、カイカーウスはアンタリア (Antalya) からコンスタンティノープルへ逃れた。カイカーウスはその後小アジアへ戻ることなく、ビザンツ領内に監禁されていたところをジュチ・ウルス (キプチャク汗國) のベルケ・ハンに救われ、クリミアに領土を與えられてこの地で生涯を終った。クルチ・アルスランはルームの唯一のサルターンとなつたが、カイカーウスとのサルターン位争いは彼ら一代で終らず、その子供たちの時代にまで持ち越された。クルチ・アルスランⅣ世が parwana Mu'in al-Din Sulaymān の計略で殺害された後 (一二六六) その息子 Kay-khosrow Ⅲ世が即位するが、一二八四年に

このスルターンが亡くなると新スルターンには父の死後クリミアから小アジアへ来たカイカーウスの子 *Mesut II* 世が即位したのである。以上のように、モンゴル侵入後のルーム・サルタナトの歴史は非常に目まぐるしく變化し、複雑極まりない。諸事件を通じて確實に言えることはスルターンの權威の低下とモンゴル人の影響の増大であろう。こうした十三世紀後半の小アジアの歴史を的確に捉えるためには一貫した視點がどうしても必要である。カーエンやスュメルのようにトルコマンの動きを中心に据えるのは非常に有意義な見方であるが、現在公刊されている史料の中にはトルコマンの動向に關する記述は乏しく、断片的にししか見出せない。筆者は十三世紀後半の小アジアの政治史を解明する視點はカイカーウス、クルチ・アルスラン兄弟のスルターン位争いには置いておかないかと考える。スルターン位をめぐる兄弟間の争いはルーム・サルタナトの歴史の中で幾度も繰り返されたが、カイカーウスとクルチ・アルスラン兄弟の争いには以前にはなかった要素が加わり、それだけに争いの様相も複雑になったと考えられる。その要素とはモンゴル人のルーム・サルタナト内政への介入である。かつてのスルターン位争いには小アジア内部のダーニシュマンド朝、或いはビザンツ帝國側の介入が時に應じて存在したが、それはつまるところ「地域史」の枠内のことにすぎなかった。ところが十三世紀後半の小アジアはユーラシア大陸を席捲したモンゴル人の手でその運命を決定されたのである。つまり十三世紀後半の小アジアの歴史は單なる「地域史」にとどまることを許されず、否應なしに「世界史」の流れに結び附けられたのである。このような小アジアの状況を象徴する事件としてカイカーウスとクルチ・アルスラン兄弟の間のスルターン位争いが舉

げられる。たとえばカイカーウスはその生涯をクリミアで終った事實が示すように、以前からキプチャク草原のジュチ・ウルスとの交渉が存在したし、一方クルチ・アルスランは初め大カソンのグユク、後にはイル汗國の側からの後押しがあった。さらにカイカーウスとクルチ・アルスランは共に凡庸な人物であったが、ルーム・サルタナトの有力なイラン人官僚が兩派に分れ、カイカーウス側にはシャムスディーン・イスファハーニー、クルチ・アルスラン側にはバルヴァーネ宰相がついてサルタナトの國政を左右したことやモンゴル人に援助されたクルチ・アルスランに反撥してトルコマンはカイカーウス側を支持したことは兄弟のスルターン位争いを政治史の一貫した視點とすることで十三世紀後半の小アジアの諸事件を解明する糸口が開けることを示しているのではなからうか。そして兄弟間のスルターン位争いは何よりもサルタナトの權威を下落させ、モンゴル人に對する抵抗の力を奪い、セルジューク朝のルーム・サルタナトを滅亡させる最も大きな直接的原因となったのではあるまいか。

以上に述べたように、筆者は今後二人の兄弟のスルターン位争いを政治史の中心に据えて十三世紀の小アジアの歴史を考察したいと考えている。

III

最後に十三世紀の小アジアの歴史を考察する上で必要な幾つかの史料に觸れておきたい。トルコの有名な歴史學者 M. Fuad Köprülü は "Anadolu Selçukluları Tarihinin Yeni Kaynakları" (T. T. K. Belleten, cilt VII sayı 27, 1943 所載) の中でセルジューク朝

期の小アジア史に關する現地史料を列擧して詳しい解説を加えている。これらの史料のうち十三世紀の小アジアに關する主要なものとして次の三つのペルシヤ語史料を擧げることが出来るであらう。

- 1) Ibn Bibi, *al-Awamīl al-Ālīya fī al-Umar al-Ālīya*.
- 2) Karīm al-Dīn Maḥmūd Aqsarā'ī, *Masnamat al-Akbar wa Masḥarat al-Akhyar*.
- 3) 著者不明 *Tārīkh-i Āl-i Saljūq*.

(1) のイブン・ビービーの *al-Awamīl*……はルーム・サルタナトに關する史料として最も有名なもので、すでに一九〇二年 *Recueil de textes relatifs à l'histoire des Seldjoucides* の第四卷として M. Th. Houtsma によりテキストが刊行された。もともとこのテキストは *mukhasar* の名で知られる一種の「要約」をもとにしたものであり、イスタンブールのアヤ・ソフィア所蔵の原テキストは一九五六年 Adnan Sadık Erzi によりトルコ歴史學協會 (T. T. K) からファクシミリ版で刊行された^①。著者は本名を al-Musayn bin Muḥammad al-Munshī al-Ja'fari al-Rughadi と言うが、その母 Bibi Munajjima がルーム・サルタナトの宮廷で占星家としてよく知られた女性であったためイブン・ビービーと呼びならわされている。イブン・ビービーが自らの父母について語っているところによれば、母親のビービー・ムナッじヤはイランの Nishāpur 父親 Majd al-Dīn Muḥammad Tarjān は Jurjan の出身であるという。両親共にホラズムシャー Jalāl al-Dīn に仕えていたが、彼の滅亡後(一二三二)タマスクスへ落ちのびていたところを當時のルームのスルターン、カイクバード一世に乞われてルーム・サルタナトに仕えることとなった。そしてイブン・ビービーの父 Majd

al-Dīn は回曆六七〇年 Sha'ban 月(西曆一二七二年三月)に没したことが史料中で述べられている。アヤ・ソフィア所蔵寫本を刊行した Erzi によれば、寫本の作成は、六七九(一二八〇/一)年である。この史料はルーム・サルタナトの歴史を研究する上で最も基本的かつ重要なものである。Houtsma が校訂した *mukhasar* (作成時期は六八一—六八四/一二八二—一二八六)の他、オスマーン朝の Murād II 世(一四二〇—一五一)の治世には Yazī'zāda 'Alī によって古オスマン・トルコ語への翻譯が作られた。後世の史家 Munajjim Bashi (一七〇二年没)の著作 *Jamī' al-Duwal* のルーム・サルタナトに關する部分はイブン・ビービーが利用されたと考えられる。

(2) カリームッディーン・マフムード・アクサラーイーの *Masnamat*……は七三三(一二三三)年、當時のイル汗國のルーム太守 Timur Tash Nūyan のために書かれたもので、アヤ・ソフィア(七三四/一二三三—一四に作成)と Yeni Cami (七四五/一三四四—一五に作成)に二種類の寫本が現存する。テキストは一九四四年オスマン・トゥランの校訂で T. T. K から刊行された。この史料はスルターン・カイホスロウ II 世の死後(一二四五)のルーム・サルタナトに關する最も詳しい史料であり、特にイブン・ビービーの *al-Awamīl*……の記述が一二八〇年で終っているので、これ以後に關しては最も重要な史料である。

(3) 著者不明の「セルジューク朝史」は七六五/一二六三—一四四年の事件までを記した短い史料で寫本はバリの Bibliothèque Nationale にある。一九五二年トルコの F. N. Uzluk によりこの寫本のファクシミリ版テキストとトルコ語譯が刊行された。

以上、三つのベルシヤ語史料の他、十三世紀の小アジアに關する同時代史料としてはパール・ヘブラエウスの「編年誌」*Chronographa*などが擧げられる。この史料は一二二五—一二二六年小アジア東南部の町マラトヤに生れたキリスト教徒パール・ヘブラエウスによつてシリア語で書かれたものである。ドーソンの「モンゴル帝國史」の中でしばしば引用された史料であるが、モンゴル人の事はかりか、トルコマンやルームのスルターンに關する記述も少くない。テキストと共に E. A. W. Budge による英譯が一九三二年に刊行されていたが、一九七六年に再版されて入手し易くなった。

この他にも小アジア周辺の諸國の史料中にルーム・サルタナトに言及した部分も少くないが、ここでは以上、筆者が利用しうる限りの政治史に關する現地史料を擧げるにとどめる。

尙、最近、清水宏祐氏により *Bibliography on Seljuq studies* (「イスラム文化研究」十二集・東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所、一九七九) が出された。緒言において氏は將來、寫本類を含めた史料のビブリオグラフィを編むことを述べており、完成が待たれる。

註

- ① トルコ共和國の學者たちは Anadolu Selçukluları と呼ぶ。史料中で一般に用いられるのは *Saltanatı Rûm* となわがルーム・サルタナト (スルターン政權) という表現である。
- ② この人物の名前でこゝでは專論がある。Arsız, "Arslan Yab-gu'nun oğlunun adı" (*Selçuklu Arastırmaları Dergisi* III, 1971 所載) この中ではフランク文字 QTLMS と表わされて

の人物の名について三つの読み方の可能性が示されている。私はこのうち從來から採用されている *Qutalmish* (「幸福を取った(者)」の意) の読み方が最も適當と考える。

- ③ *İsrâ'îl* と *Qutalmish* の死については清水宏祐「イブラーヒム・イナールとイナリーヤーン」(「イスラム世界」十號、一九七五) に言及がある。

- ④ 十三世紀アナトリア東南部のマラトヤに生れたパール・ヘブラエウスによれば、トルコマンの老人 *Baba Ishâq* は自らを *rasul* (使徒) と稱し、マホメットを嘘つきであると言ひ、こゝうした彼の教えはアナトリアの中央部から東部へかけての地域に居住していたトルコマンの間で急速に廣まり、反亂に發展したといふ。

- ⑤ この本は後に増補されてホルツェンフスキーの四巻本選集の第一巻に採録された。B. A. Голубевский: *Избранные сочинения*, том I, Москва, 1960.

- ⑥ Kerimüddin Mahmud, *Misâmet ü'l-Ahbar*. (ed.) O. Turan, Ankara, 1944.; (ed.) O. Turan, *Türkîye Selçukluları hakında resmi vesikalar*, Ankara, 1958. (『ムハンマド・メーナーク朝に關する公文書集』)

- ⑦ O. Turan, "Selçuk devri vakıfları I. Şemseddin Altun Aba vakıfıyesi ve hayatı" *Türk Tarih Kurumu Belleten* (古史・Belleten 之類) cilt XI sayı 42, 1947. "II. Mübâre-âddin Er-toğuş ve vakıfıyesi" *Belleten* XI—43, 1947. "III. Celâleddin Karatay vakıfları ve vakıfıyeleri" *Belleten* XII—45, 1948.

- ⑧ O. Turan “Türkiye Selçuklularında torrak hukuku : Miri torraklar ve hususi mülkiyet şekilleri” *Belleteri* XII —47, 1948. “Selçuk Türkiyesi’nde faizle para ikrazına dair hukuki bir vesika” *Belleteri* XVI—62, 1952.
- ⑨ 宰相 (sâhib) としたルーム・サルタナトの權力をめぐることが、一二七七年イル・ハン・ファンガの命令で處刑された。十三世紀の有名なイスラーム神祕主義の思想家、詩人 Jalāl al-Dīn Rāmī と親交があった。
- ⑩ Н. Н. Шенгелия : “Ибн Биби о походе Ала ад-Дина Кейкобада в Грузию” *Матне* I. 1975; его же, “Участие Армяно-Грузинских войск в Коседатской битве” *Проблемы Истории Турици*, Москва, 1978 所収。
- ⑪ Н. W. Duda 著、ハインツ・ワグネル 監訳、*Die Selschukenge-*
schichte des Ibn Bibi, Kopenhagen, 1959 の翻譯は Нова-
 тина のテキストを参考として、脚註や Erzī の注
 行した原書本など参考にして。
- ⑫ Ibn-i Bibi, *el-Evâmirü'l-Alâtiyye fil-umuri'l-Alâtiyye
 ünsûz ve fihristi hatırlayan A. S. Erzi*, Türkbasım, An-
 kara, 1956, pp. 442—443.

〔補記〕

ルーム・サルタナトの運命に大きな影響を及ぼしたキョセ・ダグ
 の戦うことが専門である。

J. Matuz, “Der Niedergang der anatolischen Seldschuken :
 die Entscheidungsschlacht am Kösedag” *Central Asiatic
 Journal* 17 (1973)